

【無料配布】短編ミステリ

文学フリマ東京39のための書き下ろし

A B O殺人事件

作・庵字（協力・菱川あいず）

「母子の乗った車が交通事故に遭ってな、母親は即死だったが、息子は一命を取り留めた」

訪れた探偵事務所の応接ソファに座り、そう語った警部に、

「先日の事故ですね。新聞で読みました」

探偵はコーヒーを差し出した。ミルクと砂糖のセットも忘れない。警部の対面に腰を下ろした探偵は、自分のブラックコーヒーに口をつけてから、

「でも、警部、最近の捜査一課は交通事故の調査にも協力するんですか？」

「バカ言え。そんな暇があるか」ミルクと砂糖を大量にコーヒーに投入しつつ、

警部は、「殺した。事故に遭った母親の夫が、ある男を殺害したんだ」

「犯人が分かっている事件に、僕がどう力添え出来るんです？」

「動機が不明だ」飲み込んだ甘いコーヒーの代わりに、とばかりにため息を吐き出した警部は、「その父親は、犯行自体は認めたものの、動機と、それに、被害者との関係にだけは頑なに口を閉ざしているんだ。それを探ってもらいたい。明白したというだけじゃあ調書も書けないからな」

「そういうことでしたか。まずは、詳しい話を聞かせて下さい」

「ああ」警部はカップを置くと、「実は、殺された男は当初、妻の不倫相手で、それが夫の殺害動機だったんじゃないか、と見ていたんだが」

「そうではなかった？」

「うん。話は、さっき言った交通事故に関わってくる。母子は病院に搬送されたが、結局母親は死亡してしまった。中学生の息子はというと、息はあったものの重傷で、即座に輸血をする必要に迫られていた。そこに、警察から事故の連絡を受けた父親が駆けつけた。状況を聞いた父親は、すぐに自分の血を輸血してくれと頼んだ。彼が言うには、息子と自分の血液型は同じB型だからと」

「親としては、当然の行動ですね」

「そうだな。が、念のためにと、息子と父親の血液型を判定したんだが……そこで問題が起きた。血液型が一致しなかったんだ。父親は申告どおりB型だったんだが、息子のほうはA型だった」

「それじゃあ、いくら親子とはいえ輸血は出来ませんね。父親が息子の血液型を間違って記憶していたということですか？」

「医者もそう思ったらしいんだが……異変が起きたのは、その直後だった。息子の血液型がA型だと知らされた父親は、突然逆上した直後、床に崩れ落ちて、こう叫んだそうなんだ……『ちくしょうっ！ 騙された』と」

「騙された……。警部、亡くなった母親の血液型は？」

「さすがに察しがいいな。聞いて驚け、父親と同じB型だった」

「それはおかしいじゃないですか。B型同士の夫婦からA型の子供が生まれてくるはずがない……となると、父親が叫んだ『騙された』という言葉は、そこに掛かってくる？」

「そうなんだ。息子は夫婦の間にできた子供ではありえない。その事実を知った夫は『騙された』と叫んだ。それが意味するところは……」

「夫は妻に『騙されていた』というわけですか。だから夫は、妻の不倫相手を捜しだして殺したと。でも、警部は、そうじゃなかったと言いましたよね。どうしてもそれが分かったんです？」

「殺された——不倫相手と思われていた——男の血液型がO型だったからだ」

「えっ？ O型とB型じゃあ、やっぱりA型の子供が生まれてくるはずがない」

「ああ。だから、殺された男は不倫相手なんかじゃなかった可能性が高いし、調べても妻と被害者との間に個人的な繋がりはない。夫もそうだ。夫婦と被害者は、まったくの赤の他人というわけだ。殺す動機がないというのが分かっただろ」

「殺された男が、妻と息子が遭った事故に関係しているということも？」

「ありえない。事故が起きた日に完全なアリバイがある」

「でも……その事故と殺人が、何かしら関連しているのは間違いないですよね」「たぶんな。なにせ、夫が被害者を殺したのは、事故が起きた翌日だ」

「加えて『騙された』という言葉……。分かりました。調べてみましょう」

「頼むぞ」

警部は、甘いコーヒーをもうひと口すすった。

数日後、探偵から連絡を受けた警部は、押っ取り刀で事務所に駆けつけた。

コーヒーを淹れながら探偵は、定位置のソファに腰を落とした警部に、

「まず、殺された男の正体が割れました。一種の『幹旋屋』だったんです」

「幹旋屋？ 何の世話をする幹旋屋だったんだ？」

「『子供』です」

「——子供？ 人身売買か？」

「微妙にニュアンスが異なります。彼が幹旋していたのはですね、子供と言っても『赤ちゃん』というほうがふさわしい年齢の子供でした」

「赤ちゃんって……あつ！ まさか？」

「そのまさかです。あの夫婦の息子は、その『幹旋』によって授かった子供だったんです。妻のことをよく調べてもらったら、彼女は妊娠できない体だと分かっただけです。でもこれは、いわゆる『里親』みたいな制度とは全然違います。なにせ、どういう裏の手を使っていたのか、幹旋した子供を、その夫婦の『本当の子供』として戸籍に登録していたんですからね。その子供が実の子供ではないことを戸籍上から証明するのは不可能だと思います」

「そこまでやるというのは……」

「はい。合法的に『幹旋』された子供ではないのでしょね。幹旋屋と顧客との関係も、表面上はまったく無関係であるかのように偽装されていました。警察の調べをくぐり抜けられるだけの、念の入った工作がされていたようです」

「そうだったとして、そもその話、夫がその幹旋屋を殺した動機は、何だ？」

「これは僕の推測ですが、夫婦は赤ちゃんを幹旋してもらった際に、こういう条件を出したのではないでしょう。『血液型遺伝に合致して、いざというときに輸血も行えるよう、B型の赤ちゃんにしてくれ』と。何かのきっかけで、息子が自分と両親の血液型を知ったとしても、息子が自分の出自に疑問を持つようなことがないように、という想いもあったのでしょね。しかし、どういう事情があったのか、夫婦との約束は反故にされ、A型の子供が幹旋されてしまったんです」

「——夫が言った『騙された』は、その幹旋屋に対してのものだったのか！」

「ええ。先日起きた事故で、血液型遺伝の矛盾が発覚してしまったから」
「……看護師の話によると、看護師と父親との会話——自分の血液型が、両親との血液型遺伝に合致しない型だという会話——は、息子にも聞こえていたらしい。

重傷を負いながらも、まだ意識はあったそうだから。息子は、自分が両親の実の子ではないことを知ってしまったわけだ。その両親も、母親は事故で亡くなり、父親は殺人犯に……。彼の今後の人生を想うと……やるせなくなってくるよ」

「……僕は、そんなに心配はしていませんよ」

「……どうして？」

「事故の状況を聞きました。母子の乗った車は、車線をはみ出してきたトラックと正面衝突したそうですね」

「ああ、急なカーブで、避けようがなかったと見られてる」

「こんな話を聞いたことがあります。車が正面衝突しそうになると、ほとんどの場合、運転手は右にハンドルを切るそうです。本能的に運転席にいる自分を衝突から逃がそうとするからだ。でも、今度の事故では助手席にいた息子のほうが助かりました。つまり母親は、左にハンドルを切ったわけです。なぜか。自分よりも、助手席側に乗る息子を助けようとしたからでしょう。『子供を助けない』という親心が、人の生存本能を凌駕したということですよ」

「……そうかもな」

「ええ。さらに、父親が被害者を殺した動機も、自分たち夫婦が本当の親ではないと知り、息子にショックを受けさせてしまったことを許せなかったからでしょう。両親とも、血の繋がりは関係なく息子を愛していた。そんな父と母の愛情をいっぱい受けて育った子供です。だから、僕は心配していないんです」

「……甘いな、君は」

「そうですかね？」

「ああ、甘いよ」

「いつも警部が飲むコーヒーみたいな？」

「……そうだな。でもな……」警部は、いつも以上にミルクと砂糖をコーヒーに投入して、「俺は、甘いのは好きだよ」

ミルクと砂糖の飽和水溶液と化したコーヒーを、じつくりと味わった。

お読みいただきありがとうございます。

「新生ミステリ研究会」というサークルで出店しております。

「くー21、22」ブースにてお待ちしております！

新生ミステリ
研究会
ホームページ

